

Bauernregel とゲーテ

北 村 純 一

1.

Bauernregel という単語に対する決まった日本語の訳語というのはまだ無い。例えば、Kimura-Sagara *DEUTSCH-JAPANISCHES WÖRTERBUCH*¹⁾ の Bauernregel の項には、『農民が天気や収穫の予想に用いる格言風の規則』とのおいて、これでは訳語というより説明であり、しかも正確な説明とはいえない。SAGARA *Großes DEUTSCH-JAPANISCHES WÖRTERBUCH*²⁾ にも全く同じ説明がしてあるだけである。

三修社新現代独和辞典³⁾ には『農民の言い伝え』という訳語があてられ括弧して『とくに時候に関する』という但し書きが添えられている。これも誤解を招きかねない訳語である。

小学館独和大辞典⁴⁾ には『農事金言』という訳語が当てられ、括弧して『農民の経験や迷信に基づく天気予知の規則』という分かりにくい説明が付けられている。

郁文堂独和辞典⁵⁾ には『天気俚諺』という訳語のみが載せられ、何の説明もない。

同学社アポロン独和辞典⁶⁾ には小学館と同じ『農事金言』という訳語が当てられ、『天候や農事に関する農民の言い習わし』という説明がついている。

三省堂クラウン独和辞典⁷⁾ には『(天候や収穫について農民の間に古くから伝わっている) 格言』とある。『格言』と訳語を当てるのは簡潔ではあるが、それなら Sprichwort とどう異なるのかという疑問がでてる。

どの訳語を見てもどの説明を読んでも Bauernregel とはこれこれのものであるかというイメージを作るにはいかにもこころもとない。

この辺の事情はドイツの辞書においてもあまり変わらない。

古い所からみていくと M. HEYNE *DEUTSCHES WÖRTERBUCH* 1905⁸⁾ には

Regel, wie sie die Bauern (zunächst für Feld-und Hausarbeit und Witterung) haben, übertragen auf eine einfache Regel überhaupt

とある。しかし、近年発行された新しい辞書にはこの転移した「簡単な規則一般」という意味はのっていないので、この転義的用法は消滅したと思われる。

Ruth Klappenbach u. Wolfgang Steinitz *Wörterbuch der deutschen Gegenwartssprache*⁹⁾

には

die aus alten Erfahrungen erwachsene, teilweise im Aberglauben wurzelnde bäuerliche Lebensregel

とあり、迷信というマイナス面への言及があるが、重要なのは、Lebensregelという規定である。Klappenbachに従うなら、郁文堂独和辞典の『天気俚諺』という訳語はあまりに一面的だと言わざるをえない。

DUDEN *Deutsches Universalwörterbuch*¹⁰⁾ と DUDEN *Das große Wörterbuch der deutschen Sprache*¹¹⁾ の説明は同じで

altüberlieferte Lebensregel in Spruchform, bes. über das Wetter u. seine Auswirkungen auf die Landwirtschaft

とあり、Lebensregelという規定はKlappenbachと同じであるが、特に何についてのものが多いかという点での説明が加わり、迷信に基ずくことがあるという価値評価はされていない。

Wahrig *Deutsches Wörterbuch*¹²⁾ と BROCKHAUS WAHRIG *DEUTSCHES WÖRTERBUCH*¹³⁾ の説明も同じであるが、

überlieferte, auf Erfahrung od. Aberglaube beruhende volkstümliche Wetterregel
とあり、LebensregelというKlappenbachやDUDENの規定とは異なり、天候のみを対象にするものとしている。これが小学館独和大辞典の『農民の経験や迷信に基づく天気予知の規則』という説明、郁文堂独和辞典の『天気俚諺』という訳語の基になっているのであろうが、Bauernregelは天候に関するものが確かに多いには違いないがその領域に限られるものではなく、農民の生活全般に関わるものであるから、Wetterregelという規定はあまりに一面的と言わざるをえない。例えば Albert Hauser は彼のスイス地方の Bauernregel の集大成¹⁴⁾ を、Wetterregeln, Mondregeln, Tiere als Wetterpropheten, Pflanzen als Wetterpropheten, Wetterpropheten in Haus und Hof, Atmosphärische Erscheinungen, Zeichenregeln, Beschwörungsregeln, Land- und forstwirtschaftliche Regeln, Tierhaltungsregeln, Waldbauregeln, Scherz-Bauernregeln の12の項目に分けている。そのうち直接天候に関するものは5、直接関係の無いものは7つである。

また一例をあげると、Kärnten 地方に伝わる一月元旦の結婚占い、

Gackert der Hahn, so krieg i a Mann,
gackert die Henn, so woaz i net wen.¹⁵⁾

は、まったく農業にも天候にも関係がない。

また三修社新現代独和辞典の『農民の言い伝え』という訳語も、DUDEN *Deutsches Universalwörterbuch* と DUDEN *Das große Wörterbuch der deutschen Sprache* の説明にある Spruchform という点を無視している。Bauernregel は散文の言い伝えではなく、Vers の形態

をとる韻文であるのだから。

Bauernregel が何物であるかどころか、その存在すら日本の Germanistik では、知られていないのではないかという疑いが生じる。その例の一つが瀬川真由美著『猫の嘆きと白ネズミドイツ語の動物表現』である。少し長いが疑念を起こさせる部分を引用してみよう。

Wenn der Hahn auf dem Mist kräht, ändert sich das Wetter,
oder es bleibt, wie es ist.

オンドリが糞を踏んで鳴くときは、お天気が変わるかそのままかだ。つまり、「何も予報していない」ということなのです。最近、注目を集めている気象予報士のうち、どなたかが天気予報の時間に、「現在、晴れておりますが、今、オンドリが糞を踏んで鳴きましたので、お天気は今後変わるか、あるいはこのまま晴れ続けるか、どちらかでしょう、アッハッハ」なんて言ってくれたら、雨が降っても笑って許してしまうのですが。¹⁶⁾

愉快的コメントが付けられているが、Wenn der Hahn auf dem Mist kräht, がある Bauernregel の一部で ändert sich das Wetter がその Bauernregel の変形 oder es bleibt, wie es ist. がこの Bauernregel を馬鹿にして後から付け加えられたもので、これが Bauernregel のパロディーであるという認識がまったく無い。元の Bauernregel は

Kräht der Hahn auf dem Mist,
das Wetter im Wechsel ist.
Kräht er auf dem Hühnerhaus,
hält das Wetter die Woche aus.¹⁷⁾

である。(地方地方によって多少の相違、バリエーションはありうる。) それに Mist を糞と訳すのは誤訳である。まったく „so ein Mist!“ これは堆肥である。農家にとって、ましてや化学肥料の無かった時代においては堆肥作りは大切な仕事である。その置き場は家畜小屋や鶏小屋の近くであった。雨が近づくとこの堆肥の中から虫が出てくる。これを仲間に知らせるためにオンドリが堆肥の上で鳴く。また鶏舎の近くであるから、もし雨が強くなってその雨を避けるためには、堆肥の付近は都合がいい。だから遠くに行っている鶏たちを呼び寄せるためにオンドリが鳴く。しばらくすると雨が降る。こういう法則である。糞を踏みつけて鳴くのではなく、堆肥の上で鳴くのである。動物に天候や地震に対する予知能力があると断言するのは、あまりに非科学であろうが、動物が人間より温度、湿度、風向、風力、気圧などについて敏感である可能性は充分ある。ともかくドイツ農民はオンドリが鳴くのは天候の変化の前触れであると経験上考えていたのである。ただあまり当てにはならない。それで oder es bleibt, wie es ist. が付け加えられ Bauernregel の信憑性をからかったのである。この文句は Bauernregel 一般を擲

揃するのに使われる。ただ瀬川真由美がテレビ、ラジオの天気予報に関連づけたのはこれは正解で、現在の科学成果を駆使した天気予報でも当たるのはせいぜい短期予報、中期長期の天気予測など誰も信用していないから、ドイツでも天気予報のあたらなさを馬鹿にするときに、この Bauernregel のパロディーが使われるようである。

Bauernregel を概念的に定義するより、これが何であるかを知るには、例示したほうが、イメージを作りやすい。具体例を挙げてみる。

上述したように Bauernregel イコール Wetterregel と思われているほどであるから、一番多いのは天候に関するものである。ちなみに Bauernregel の中の Regel は文字どおり「確定したことや一致したことに基づくか認識によって決定された法則性と経験から得られた行動の指針。規定」の意味である。また Bauernregel は天候を問題にする場合、一定程度の期間における天候を扱うので、本当は Wetter ではなく、ある期間の天候をさす Witterung を付して Witterungsregel とでも呼ぶべきものである。民間信仰においてはその日に将来の運命が決められる日がある。これを Lostag と呼んでいる。例えば次の 2 つの Bauernregel における Dreikönig である。

Ist Dreikönig hell und klar,
gibt's viel Wein in diesem Jahr.

Ist bis Dreikönig kein Winter,
folgt keiner mehr dahinter.¹⁸⁾

Dreikönig とはマテオによる福音書第 2 章に登場するあの東の国の博士たちである、イエズスの誕生を予言し、イエズスの誕生を見、礼拝し、贈り物を献上し、故国に去って行ったあの賢者たちである。1月6日が、教会暦によるとこの博士たちの日で、その名前 Caspar, Melchior, Balthasar の頭文字 C+M+B をこの日に書きこれをお守りにする風習がある。また南ドイツやオーストリアではこの 1月6日に子供たちがこの 3 博士礼拝の歌を歌いながら家々を巡り、その褒美をもらい、チョークでこの C+M+B を玄関や納屋に描く風習がある。上の Bauernregel の意味はこの 1月6日に晴れればこの年にはワインがよくできるということであり、また 2 つ目の Bauernregel の意味はこの日を過ぎれば極端な寒さはもう来ないと教えている。1 つ目では klar と Jahr が、2 つ目では Winter と dahinter が韻を踏んでいる。この教会暦による聖者の日が Lostag とされる例を少し挙げてみよう。

Ist St. Petrus kalt,
hat die Kält' noch lang Gewalt.¹⁹⁾ (St. Petrus は 2月22日)

Kunigund -

Bauernregel とゲーテ

macht warm von unt'.²⁰⁾ (Kunigund は 3 月 3 日)

Ambrosius,

schneit oft den Bauern auf den Fuß.²¹⁾ (Ambrosius は 4 月 4 日)

Pankrazi, Servazi, Bonifazi

sind drei frostige Bazi, (Pankratius, Servatius, Bonifatius は die Eisheiligen

und zum Schluß fehlt nie **とも呼ばれ**, 5 月 12 日から 14 日まで, Sophie は

die kalte Sophie.²²⁾ die kalte Sophie **とも呼ばれ** 5 月 15 日)

Vor Johanni bitt' um Regen,

nachher kommt er ungelegen.²³⁾ (Johannes は洗礼者ヨハネの誕生日で 6 月 24 日)

An Jakobi Regen

stört den Erntesege.²⁴⁾ (Jakob の日は 7 月 25 日)

Laurentius, heiter und gut,

einen schönen Herbst verheißen tut.²⁵⁾ (Laurentius の日は 8 月 10 日)

Matthies macht die Birnen süß.²⁶⁾ (Matthäus の日は 9 月 21 日, この日に天気がいいと梨が良く熟すということである。)

Galliwein - Sauerwein,

(St. Gallus の日は 10 月 16 日, この頃に収穫されたブ

Galliwein - Bauerwein!²⁷⁾

ドウで作られたワインは辛口であると言っている。)

Ist die Martinsgans am Brustbein braun,

wird man mehr Schnee als Kälte schau'n; (Tours の司教であった St. Martin の日

ist sie aber weiß, は 11 月 11 日で, この日に鷺鳥を食べる

so kommt weniger Schnee als Eis.²⁸⁾ **風習がある。)**

Regnet's an St. Nikolaus

wird der Winter streng und graus.²⁹⁾ (Nikolaus の日は 12 月 6 日)

最後の例のように Lostage の天候から後の天候を予測するというのが典型的な Bauernregel である。しかし Matthäus や St. Gallus の日の例のように収穫など農事に関するものも多い。本

来この農事に関するものが農民には重要で、この農事はその年毎の天候に大きく左右されるから自ずと天候に関するものも多くなったのである。 Bauernregel の中心にあるのはあくまで生業の農業である。

例えば種まき、植え付けに関してつぎのようなものがある。

Kauf' guten Samen -
das ist schon ein Amen.³⁰⁾

Legst du mich im März,
treibst du mit mir Scherz
Legst du mich im April,
komm ich, wann ich will.
Legst du mich im Mai,
komm ich eins, zwei, drei!³¹⁾ (ich はジャガイモ)

Wer sehr gerne Erbsen mag,
säe am Gründonnerstag.³²⁾ (Gründonnerstag は復活祭直前の木曜日)

Bohnen lege dir erst an,
ist vorbei St. Gordian.³³⁾ (Gordian は5月10日)

Wer Rüben will, recht gut und zart,
sä sie an Mariä Himmelfahrt.³⁴⁾ (Mariä Himmelfahrt は8月15日)

それに収穫に関する Bauernregel も多い。天候の収穫への影響を述べるものや、収穫の時期を教えるものがある。

Regenjahr - Notjahr
Schneejahr - Brotjahr.³⁵⁾

Januar muß vor Kälte knacken,
wenn die Ernte soll gut sacken.³⁶⁾

Wenn der Januar trocken,
füllt sich der Speicher mit Roggen.³⁷⁾
Ein grüner März

erfreut kein Bauernherz.³⁸⁾

Stich den Spargel nie
mehr nach Johanni.³⁹⁾ (Johanni は 6 月 24 日)

Wenn der Jakobi kommt heran,
man den Roggen schneiden kann.⁴⁰⁾ (Jakobi は 7 月 25 日)

ワイン作りに携わる Winzer の Regeln も同様である。ぶどう作りにどのような天候がいいのか、悪いのか、必要な農作業上の知識が Regeln で教えられる。

Pfingstregen
bringt Weinsegen.⁴¹⁾

Juni trocken mehr als naß
füllt mit gutem Wein das Faß.⁴²⁾

Nur in der Juliglut
wird Obst und Wein dir gut.⁴³⁾

Oktober Sonne kocht den Wein,
und füllt auch große Körbe ein.⁴⁴⁾

Viel naß - wenig im Faß.⁴⁵⁾

また肥料に関するものもある。

Wer den Dünger schont,
dem wird schlecht gelohnt.⁴⁶⁾

Was stinkt,
das düngt.⁴⁷⁾

このように農事、それとそれに重大な影響を及ぼす天候が主に扱われるのである。Bauernregel は学校教育から閉め出され、生業の農業においても教科書をもたなかった農民が農業を営む上での指針である。が、それだけではない。他の例をあげると、例えば農民から見た社会制度批判の Bauernregel もある。

Bauern machen Kaufleute,
Kaufleute machen Junkern,
Junkern machen Bettler.⁴⁸⁾

また一種の宗教批判ととれるものもある。Bauernregelの農民は現世中心主義で現実的である。

Ackern und düngen
ist besser
als beten und singen.⁴⁹⁾

Lange Bratwürste
und kurze Predigten
haben die Bauern gerne.⁵⁰⁾

農民が経済制度上置かれている現状を述べているものもある。

Hat der Bauer Geld
hat's die ganze Welt.⁵¹⁾

しかし

Besser Kleingeld
als kein Geld.⁵²⁾

Die kleinen Wasser allgemein
laufen in die großen hinein.

Ein faules Ei
verderbt den ganzen Brei.⁵⁴⁾

Ein Finger macht keine Hand.
ein Balken noch keine Wand.
eine Schwalbe noch keinen Sommer.⁵⁵⁾

などのように農業、農民生活に直接関係付け無くとも理解できるものになると、BauernregelとSprichwortの違いが問題になってくる。

*Sprichwörterlexikon*の編者Horst und Annelies BeyerはそのEinleitungで何がSprichwortであるか定義を試みている。語源的にはsprechenから来ているのであるから、geläufiges, vielgesprochenes Wortであり、一般にSatzcharakter, Volkstümlichkeit, Einprägsamkeit und eine auf verallgemeinerter Erfahrung beruhende, zur praktischen Lebensregel verdichtete

Aussageが特徴であり、Sprichwortを allgemein oder zumindest weithin bekannte, fest und dauerhaft geprägte Sätze, die eine prägnant formulierte Lebensregel bzw. verallgemeinerte Lebenserfahrung enthaltenと定義づけている。さらにSprichwortはしばしば Miniaturtexte von manchmal großem poetischem Reizであるとして、形態上の特徴、Endreim, Binnenreim, StabreimやKnappeheit, Parallelismusをあげている。加えてよく使われるパターン、„Kein A ohne B“, „Wie A, so B“, „Besser/Lieber A als B“, „Erst A, dann B“, „Wer A tut,tut B“をあげ、さらにBildhaftigkeitを特徴だとし、その一つとしてPersonifizierungをあげている。⁵⁶⁾

しかしこれら全てが Bauernregelに当てはまる。この著者たちもこの *Sprichwörterlexikon* に Bauernregelを取り上げなかった理由として述べているのは

Sie sind so zahlreich, daß sie eigenständigen Ausgaben vorbehalten bleiben müssen.⁵⁷⁾

というもので数量からくるものでしかない。Sprichwortと Bauernregelの間に明白な境界線を引くのは難しいが、しかし BauernregelがSprichwortと違う点は allgemein oder zumindest weithin bekanntという点に認められる。Bauernregelは農民層に限って定着した言葉であり、Sprichwortほどの一般性、普遍性をもたない。それは一般に知られていないという面だけでなく、その知恵の他分野への応用性という点でも限られたものである。言葉を変えれば BauernregelはSprichwortのSoziolektであると定義できよう。

2.

この Bauernregelについてゲーテが言及している箇所が、1989年に die Akademie der Wissenschaften der DDR, die Akademie der Wissenschaften in Göttingen, die Heidelberger Akademie der Wissenschaftenによって発行された *GOETHE-WÖRTERBUCH*¹⁾によると、3箇所ある。1箇所は *Sanct-Rochus-Fest zu Bingen* の中、もう2箇所は1816年9月21日と22日の日記の中である。この日記の2箇所も *Sanct-Rochus-Fest zu Bingen*に関連している。

この小品 *Sanct-Rochus-Fest zu Bingen* はゲーテ研究ではあまり注目されない作品である。Friedrich Gundolfの *Goethe* 3部作²⁾ においてもこの作品に関しては、6行、ほとんど無意味なステレオタイプのゲーテ賛辞が述べられるだけであるし、Georg Brandesの *Goethe* には何の記述もないし、Emil Staigerの *Goethe*⁴⁾ においても一言も言及されていないし、Karl Otto Conradyの *Goethe Leben und Werk*⁵⁾ においてはわずか20行ほどの言及があるが、この作品に関する伝記上の事実と作品の内容の再述にすぎない。

評価らしいものが散見するのは *dtv Gesamtausgabe 29*における Peter Boernerの Nachwort⁶⁾ Hamburger Ausgabeにおける Erich Trunzの Anmerkungen⁷⁾ ぐらいである。この作品について見てみよう。

ゲーテは1814年7月から10月にかけてライン川マイン川地方に旅行にでる。Gero von Wilpertの*Goethe-Lexikon*によるとその間、8月16日ゲーテは音楽家C.F.Zelterと鉱物学者L.W.Cramerを伴って、Rüdesheimからライン川を越え、Bingen近郊のSt.Rochus礼拝堂の清祓式に参列する。しかしこの*Goethe-Lexikon*によるとSankt Rochus-Fest zu Bingenの項に

Am 16.8.1814 nahm G. in Begleitung von Zelter und L.W.Cramer von Wiesbaden bzw. Rüdesheim aus an der Weihe der in den Kriegsverwüstungen 1795 zerstörten und 1814 wieder hergestellten Kapelle (1677) des Pestheiligen St.Rochus bei Bingen teil.⁸⁾

とあり、この日8月16日にゲーテがWiesbadenから出立したのかそれともRüdesheimからなのかはっきりしない。しかし、この同じ*Goethe-Lexikon*のBingenの項には不統一なことに

Die Stadt selbst besichtigte er mit Zelter von Wiesbaden aus am 16.8.1814 zum ausführlich beschriebenen Sankt Rochus-Fest zu Bingen (1816) mit anschließender Bootsfahrt durch das Binger Loch,...⁹⁾

と記されていて、8月16日にWiesbadenから出立したことになっている。しかしこれは上に記したようにRüdesheimからで、Wiesbadenから出立したというのは誤りである。というのもこのBingenに行った8月16日の前日15日の日記の記述にこうある。

Gebadet. Einfall nach Rüdesheim zu gehen. Anstalten dazu. Mit Zelter zu Hause gespeist. Mit ihm und Cramer nach Tisch abgefahren. Herrlich Wetter und Weg. Rüdesheim im Adler abgetreten. Hofr. Goetz. Östr. Kriegs Comm. Ingelheimer Ruine.¹⁰⁾

この記述のAnstaltenは旅の準備をしたということであり、im Adler abgetretenのabtretenはいまや古語になっているが、投宿したという意味である。次の日にRüdesheimの対岸にあるBingenに行くゲーテ一行がわざわざ当時陸路3時間半もかかったWiesbadenまでとって返してそれからまたBingenに渡ったとは考えられない。またBingen近郊のSt.Rochus礼拝堂の清祓式に参列した16日の翌日の日記には

Seit langer Trockne Nachts starker Regen. Einfeld frühe Schema des Rochus Festes. Es klärt sich auf. Abfahrt. Schierstein. Bey Habel und Gernig. v. Harding. Wiesbaden.

と書かれている。15日にWiesbadenを出立したゲーテ一行はRüdesheimで一泊し次の日Bingenを経てEinfeld(今はEltvilleという)まで行きここでまた一泊し17日にWiesbadenに戻ったのである。*Goethe auf Reisen*の著者Georg Balzerも

Goethe weilte 1814 vom 29. Juli bis zum 12. Septembser in Wiesbaden zur Badekur. Er hatte die Vaterstadt Frankfurt und die Gegenden um Rhein und Main seit 1797 nicht wiedergesehen. Von Wiesbaden unternahm er am 15. August eine Wagenfahrt nach Rüdesheim, nahm am Tage darauf am St.-Rochus-Fest teil und kehrte am 17. August nach Wiesbaden zurück.¹¹⁾

と書いている。これがこの3日間のゲーテの動きである。

この1814年8月16日の日記の記述は Bingen 近郊の St.Rochus 礼拝堂の清祓式のことを簡潔に述べている。

16. Reiner Sonnenaufgang. Zu Goetz. Dessen Mine=ralien. Nach Hause. Überfahren. Auf die Rochus Capelle. Große Wallfahrt. Bis Mittag. Hinab nach Bingen. Bingerloch. Rückkehr. Bey Hofr. Goetz gespeist. Abgefahren. Bis Elfeld, in der Rose abgetreten.

この小旅行に参加した人達にとってこの日はよほど楽しい一日だったようである。Johann Peter Eckermann はその *Gespräche mit Goethe* の中で1823年12月4日のゲーテ家での食卓での会話について報告しているが、そのなかでこの日ゲーテ家を訪問した Zelter は、あの祝祭の日の2人の美しい娘のことをとくに覚えていて、その愛らしさは自分の胸に深く刻み込まれていて、いまでもそのことを思い出すと幸せな気持ちになると述べている。¹²⁾ この日の華やいた雰囲気は想像される。

翌日の1814年8月17日の日記にはすでに先ほど引用したように Elfeld frühe Schema des Rochus Festes. の字句がみえ、16日の体験はゲーテに感銘を与え、作品 *Sanct-Rochus-Fest zu Bingen* の構想はもう始まっている。

この作品の成立経過は Gero von Wilpert の *Goethe-Lexikon* によると次のとおりである。

am 17.-26.8.1814 entwarf er ein Schema zur literarischen Darstellung des Festes, doch erst am 25.7.-26.8.1816 entstand in Bad Tennstedt die heiter distanzierte, autobiographische Prosaskizze, die in *Über Kunst und Altertum* (I,2,1817) erschien,¹³⁾

しかし成立事情はゲーテの日記を見る限り、そう単純ではない。確かに17日の最初の構想への言及に続き同月16日と19日に St.Roch という記述が見られるから最初の構想がこの時練られたのは間違いない。ただゲーテは1814年8月16日に Bingen を訪れただけではなく、もう一度同じ年の9月5日に Bingen を訪れ Rochuskapelle を見ている。1日から8日までゲーテは Franz Brentano, Antonie Brentano 夫妻の招待を受け Brentano 家の Winkel の領地に滞在したのである。これもゲーテには楽しい体験だった。Antonie Brentano は夫がゲーテに Jahrhundertwein と呼ばれた1811年ものワインを贈って彼を喜ばせたと書き記している。¹⁴⁾ 確かにこれからしばらく日記においても *Sanct-Rochus-Fest zu Bingen* という作品に直接関係する記述は表れない。しかし1815年7月5日には Rochus Morgende Partie という記述がある。全くこの作品からゲーテが離れていたとは考えにくい。この作品に関して頻繁に言及されるようになるのは確かにようやく1816年7月25日からである。それと Rochuskapelle に関してもう一つゲーテの宗教観を知る者にとっては不可思議なエピソードが付け加わる。この Rochuskapelle にゲーテは自身で素描を描き、それを Johann Heinrich Meyer に下絵を描かせ、

Louise Seidler に完成させた St.Rochus の祭壇画を寄進しているのである。Johann Heinrich Meyer はゲーテが Kunscht-Meyer と呼んだスイス人の画家で、芸術評論家でもある。1786年にゲーテと知り合い、1787年以降二人は親交を結び、Carl August が1776年に創設した Früstliche freye Zeichenschule の教師にゲーテの力もあって1795年になり、1806年この学校の2代目校長になった。ゲーテの芸術観に多大な影響を与えた人物である。また Louise Seidler も画家で、ゲーテは彼女を幼い頃から知っていて、Louise Seidler はゲーテの助力もあって絵画を学んだ。ピーダーマイヤー風の肖像画家で、1811年11月にはゲーテの肖像を描いている。1837年には宮廷画家になっている。慇懃で謙虚、ゲーテのみならずその周りの人々からとても好かれた人物であった。この絵の製作過程もゲーテの日記でかなり詳しくたどることができる。1816年2月2日には Rochusbild という記述があり、同月26日と28日には Kunscht-Meyer とこの絵について話っているし、また3月2日には Louise Seidler から画布の大きさを尋ねられ、同月8日そのことについてゲーテは Louise Seidler に手紙を書いている。同月19日にも Meyer とこの絵について話しているし、この頃 Louise Seidler は、日記では Dlle Seidler と記されているが、頻繁に登場する名である。5月24日には Bey Dlle Seidler Fortschritt des Rochusbildes. とあり、絵画が順調に仕上がっていくのが分かる。この間、1816年6月6日ゲーテの妻が死去し、その事も日記には簡潔に Sie verschied gegen Mittag. Leere und Totenstille in und außer mir. と書かれている。同月12日には Louise Seidler から絵に関して問い合わせがあり、22日には彼女が絵を描き終えてゲーテを待ち受けているという報せが入る。27日にはゲーテは Louise Seidler の所へ出かけ、この絵についてさらに協議している。7月10日 Jena の Louise Seidler から Weimar のゲーテへこの絵が送られてくる。この絵を7月14日ゲーテは Meyer と共に荷造りし、7月16日 Bingen の Geistliche Behörde にご丁寧にもまず発送の予告と荷解きの際の注意事項を書き送り、18日にまた Rochusbild を郵送した旨書き送っている。この一件が落ち着いてからゲーテは *Sankt-Rochus-Fest zu Bingen* に取りかかるのであるが、この絵に関してまだ後日談がある。この絵は1816年 Sankt-Rochus-Kapelle のしかるべき場所に置かれる。しかしこの堂は1889年落雷のため焼失する。が、この絵は幸い救出され、その後1895年再建された堂に戻される。そして今なおここにあるという。¹⁵⁾ もう一つの後日談は、ゲーテはこの絵をさらに Johann Heinrich Meyer と同じく Früstliche freye Zeichenschule の教師であった Carl August Schwerdgeburth に依頼して銅版画にさせ、それを彼の雑誌 *Über Kunst und Altertum*, Band I, 1. Heft 1816に載せている。後代、例えばゲーテ研究家 Erich Trunz にすら Man mag den künstlerischen Wert des Bildes in Frage stellen¹⁶⁾ と皮肉られる代物ながらゲーテにはかなりの愛着があったのであろう。

しかしたとえ厳格なプロテスタントを父親に持つとはいえ、そして単純に割り切れぬ複雑な面があるとはいえ、ゲーテはキリスト教とは基本的に無縁な人間である。特に教会としてのキリ

スト教には強い反感を持っていた。それは例えば、(ich hab) von Erschaffung der Welt an, keine Confession gefunden, zu der ich mich völlig hätte bekennen mögen. (an Boisserée, 22.3.1831) という言葉や、Da ich zwar kein Widerkrist, kein Unkrist aber doch ein dezidirter Nichtchrist bin, so haben mir dein Pilatus und so weiter widrige Eindrücke gemacht. (an Lavater, 29.7.1782) という文句から読みとれる。しかし彼は形式的にはルター派の教会に属し、教会と公の場で事を構えることは無かった。息子の August には Herder によって堅信礼を受けさせているし、当初は野合でしかなかった Christiane Vulpius との結婚も遅時きながら式を行って教会による認可を受けているし、この妻のためにその死後身分にふさわしい埋葬をしている。ただけって教会側にゲーテの宗教態度がすんなり受け入れられたとは言い難いけれど。それは当たり前で、ゲーテは Lavater に宛てられた手紙の言葉

Du hältst das Evangelium wie es steht für die göttlichste Wahrheit, mich würde eine vernehmliche Stimme vom Himmel nicht überzeugen, daß das Wasser brennt und das Feuer löscht, daß ein Weib ohne Mann gebiert, und daß ein Todter aufersteht; vielmehr halte ich dieses für Lästereien gegen den großen Gott und seine Offenbarung in der Natur. (An Lavater, 9.8.1782)

からも分かるようにキリスト教のドグマや、定款、典礼様式などに強い不信感を持っていた。ゲーテの宗教観に最も合致したのは古代ギリシャ・ローマの宗教である。前述の引用中の den großen Gott und seine Offenbarung in der Natur から分かるように神と自然はゲーテにとって同じものであった。ゲーテはペラギウス主義的な汎神論的な考え方をしていた。ゲーテは自分自身をはっきり Heide と呼んでいる。Es soll mir nunmehr höchst angenehem seyn, als letzter Heide zu leben und zu sterben (an Jacobi, 7.3.1808) ゲーテの擬古典主義はなにも文学上の現象だけに限られるものではなく、その宗教観においてもゲーテは古典主義者であったのである。

Sankt-Rochus-Fest zu Bingen は *Über Kunst und Altertum*, Band II に発表されているが、例の銅版画が載った Band I にも次のような非キリスト教的発言が見られる。この作品を発表するときにもゲーテの宗教観にはたいした変化は見られないのである。

Die Mutter jenes Sohnes konnte als die reinste der Frauen verehrt werden; denn schon im heidnischen Altertum war Jungfräulichkeit und Mutterschaft verbunden denkbar. Zu ihr tritt ein Greis, und von oben her wird eine Mißheirat gebilligt, damit es dem neugebornen Gotte nicht an einem irdischen Vater zu Schein und Pflege fehlen möge.¹⁷⁾

マリアの結婚はゲーテには eine Mißheirat なのである。ゲーテはキリスト教という宗教の圏外に身を置いていた。つぎの教会における絵画の重要性を述べる文もイロニーにあふれている。Jedoch hatte leider in dieser Epoche der Orient schon ein trauriges Ansehen, und was die

Kunst betrifft, blühten jene obgenannten Individualitäten nicht sogleich auf, aber sie verhinderten doch, daß ein alter, starrer, mumienhafter Stil nicht alle Bedeutsamkeit verlor. Man unterschied immerfort die Gestalten; aber diesen Unterschied fühlbar zu machen, schrieb man Name für Name auf das Bild, oder unter dasselbe, damit man ja unter den immer häufiger und häufiger werdenden Heiligen und Märtyrern nicht einen statt des andern verehrte, sondern einem jeden sein Recht wie billig bewahrte. Und so ward es denn eine kirchliche Angelegenheit, die Bilder zu fertigen.¹⁸⁾

そのゲーテが、Stolberg, E.Schlegel, A.Müller, Z.Werner, F.Schlosser などロマン派の面々のカトリックへの改宗に対して反感を隠そうとしなかったゲーテが、こともあろうに歴史上はつきりとは証明もされていない、公的には認可もされていないペストに効くという聖者にこれほどまで肩入れするというのは納得のいかない事である。しかしこの矛盾にたいする答えは作品の中にある。

対ナポレオン同盟戦争では、この Sankt-Rochus の堂は高台にありこの地域を見渡せるものであるから哨所に使われ、礼拝に必要なもの全て取り除かれ露営や厩に使われて汚されたのを、礼拝堂として復元したのである、であるから、24年もの長い期間祝えなかったお祭りの再現であり、それは宗教上の出来事であるばかりか、長い戦乱後の平和の喜びでもあったのである。ゲーテから引用すれば、

Bei allem diesem konnte es denn nicht fehlen, daß man den heiligen Rochus als einen würdigen Gegenstand der Verehrung betrachtete, da er, durch das gefesselte Zutrauen, diesen Hader- und Kriegsposten augenblicklich wieder zum Friedens- und Versöhnungsposten umgeschaffen.¹⁹⁾

という事情であった。しかもこの平和は戦争の間自由に行き来できなかったライン左岸の回復も意味していた。

So ward vorgeschritten, um dies politisch-religiöse Fest zu feiern, welches für ein Symbol gelten sollte des wiedergewonnenen linken Rheinuferes sowie der Glaubensfreiheit an Wunder und Zeichen.²⁰⁾

この引用から明らかなようにこれは単に回復された信仰の自由という宗教の祝いであっただけではなく、ライン河左岸の失地回復という平和のシンボルでもあった。

それにこの礼拝堂の再建時の逸話が付け加わる。この礼拝堂の修復のために廃絶した Eibingen の修道院の祭壇、説経壇、オルガン、祈祷台、告白場等々が用いられた。これは本文の

Da man sich nun von protestantischer Seite dergestalt förderlich erwiesen,²¹⁾ から分かるようにプロテスタント側から提供されたものであり、それを Bingen の市民が自らの手でひとつひとつ Eibingen から礼拝堂まで運んだのである。であるから、この祭りはカト

リックとプロテスタントの和解をも意味しているのである。両者の和解を望んでいたゲーテをこのことが感動させたのは間違いない。この二重の和解は次の文にも表現されている。

Der ältere Gläubige kann nun vor demselbigen Altar auf dem linken Rheinufer knien, vor welchem er, von Jugend an, auf dem rechten gebetet hatte.²²⁾

もうひとつこの作品に頻発する形容詞 *fromm* がゲーテがこの祭りをどう考えていたかを明白にしてくれる。

eine fromme und frohe Angelegenheit für die ganze Gegend,
Unter solchen frommen und heitern Aussichten,
auf frommen Schultern,

Bei Erneuerung dieser könnte frommer Geist und redlicher Kunstsinn mitwirken,
ゲーテはこの礼拝堂の再建に関わった人たち、またこの日の清祓式に参加した人たちを *fromm* と形容しているのである。この素朴で健康な生活態度、宗教心はキリスト教のドグマや典礼とは無関係で、ゲーテには好ましいものであった。この作品には出てこないが、これに反し非難する時にはゲーテは *fromm* からの派生語 *frömmelnd*, *Frömmelei*, や *deutschfromm* という複合語を用いている。1814年8月16日ゲーテの会った人たちの宗教心は、キリスト教のドグマ、典礼という形だけのものとは無関係でゲーテには好ましいものであったのである。

成立経過に戻ろう。1816年7月25日の日記には *Schema zum Rochusfest...Schema dicktirt...Schema korrigirt.* とありこの日に創作が再開されたのが分かる。その後26, 27, 28, 29と *St. Roch.* もしくは *St.Rochus* の記述が見られ集中的にこの作品にゲーテが取りかかっていたことが分かる。29日には *St.Rochus Abschr. vollendet.* とあり、一応の完成を窺わせる。しかし8月2日には *St.Rochus fortgesetzt.* と書かれていて継続して書き直されている。その後 *St. Rochus* について8月3日, 4日, 5日, 8日, 9日, 10日, 12日, 13日, 14日, 15日と1日2日飛ぶときもあるが連続して言及がある。15日には *St.Roch reine Abschrift angefangen.* と記されている。先述したようにこの作品の成立経過は Gero von Wilpert の *Goethe-Lexikon* によると Bad Tennstedt で1816年7月25日から8月26日の間に成立したとされているが、日記には8月16日から9月16日までの1ヶ月間 *St.Rochus* に関する何の記述もない。9月17日に *Rochusfest zur Hälfte gelesen.* とあり、清書された草稿を読んだのであろう。翌日の18日には *St.Rochus=fest revidirt.* とあり推敲が始まっている。9月20日, 21日, 22日, 23日, 24日並びに翌月10月17日, 18日, 19日に *St.Rochusfest* に手が入れているのが日記から分かる。そして10月27日には *Schluß des Rochusfestes.* の字句が見られ、この日に一応終了したらしい。であるから、先ほどの Gero von Wilpert の *Goethe-Lexikon* による1816年7月25日から8月26日の間に成立したという説は、創作開始時期に関しては正しいが、終了時期に関しては誤りである。ただ1816年10月27日でこの作品に関して全てが終わったのではなく、10月30日には

Rochus Capelle. と記入されているし、同月31日には Revision des St.Rochus Festes. と書かれていて校正をしている。11月になっても Rochusfest と 2日, 3日, 4日, 7日, 8日, 9日, 10日, 11日に言及されていて、11日には Im Rochusfest Nachträge und Ergänzungen. とある。これ以後言及のあるのは先述の絵に関してであるから、日記による限り、この作品の完成は11月11日となる。

この一種の旅行記の中で Bauernregel に言及されるシーンがある。祭りを祝う参列者のために設けられた屋台、テントでソーセイジを食べ、ワインを飲みながらこの旅行記の主人公は、ワイン談義に耳を傾けたり、Sankt Rochusの伝説を聞き出そうとしたり、するのであるが、そのときの話題の一つがこの Bauernregel なのである。Verschiedene Bauernregeln und sprüchwörtliche Wetterprophezeiungen, welche dies Jahr eingetroffen sein sollten,²³⁾ それを主人公 ich は Taschenbuch にメモする。

そのメモとして次の16の法則をあげている。箇条書きで書き出すと次のとおりである。

- Trockner April ist nicht der Bauern Will’.
- Wenn die Grasmücke singt, ehe der Weinstock sproßt, so verkündet es ein gutes Jahr.
- Viel Sonnenschein im August bringt guten Wein.
- Je näher das Christfest dem neuen Monde zu fällt, ein desto härteres Jahr soll hernach folgen; so es aber gegen den vollen und abnehmenden Mond kommt, je gelinder es sein soll.
- Die Fischer haben von der Hechtsleber dieses Merkmal, welches genau eintreffen soll: wenn dieselbe gegen dem Gallenbläschen zu breit, der vordere Teil aber spitzig und schmal ist, so bedeutet es einen langen und harten Winter.
- Wenn die Milchstraße im Dezember schön weiß und hell scheint, so bedeutet es ein gutes Jahr.
- Wenn die Zeit von Weihnachten bis Drei König nebligt und dunkel ist, sollen das Jahr darauf Krankheiten folgen.
- Wenn in der Christnacht die Weine in den Fässern sich bewegen, daß sie übergehen, so hofft man auf ein gutes Weinjahr.
- Wenn die Rohrdommel zeitig gehört wird, so hofft man eine gute Ernte.
- Wenn die Bohnen übermäßig wachsen und die Eichbäume viel Frucht bringen, so gibt es wenig Getreide.
- Wenn die Eulen und andere Vögel ungewöhnlich die Wälder verlassen und häufig den Dörfern und Städten zufliegen, so gibt es ein unfruchtbares Jahr.

- ・ Kühler Mai gibt guten Wein und vieles Heu.
- ・ Nicht zu kalt und nicht zu naß, füllt die Scheuer und das Faß.
- ・ Reife Erdbeeren um Pfingsten bedeuten einen guten Wein.
- ・ Wenn es in der Walpurgisnacht regnet, so hofft man ein gutes Jahr.
- ・ Ist das Brustbein von einer gebratenen Martinsgans braun, so bedeutet es Kälte; ist es weiß, Schnee.²⁴⁾

ゲーテは *Dichtung und Wahrheit* の zweiter Teil・6. Buch で Ich war nämlich in dem oberdeutschen geboren と言い、父親の eine bessere Sprache への教育にも拘わらず、so blieben mir doch gar manche tiefer liegende Eigenheiten, die ich, weil sie mir ihrer Naivität wegen gefielen, mit Behagen hervorhob と述べている。その方言の特徴をゲーテは Gleichnisse, Anspielungen と sprichwörtliche Redensarten に見、それはしばしば野卑で、繊細な耳の持ち主には聾聵をかうものであると言っている。²⁵⁾ しかし Hamburger Ausgabe の注釈者も Goethe liebte zeitlebens am Sprichwort Mutterwitz und Schlagkraft, Bildhaftigkeit und Urwüchsigkeit.²⁶⁾ と書いているように、この種の言い方がゲーテが自分の育った地域から受け継いだ言語上の好みであった。ここに Bauernregel が挿入されたのもこの種の好みのせいであろう。またゲーテは若き頃ヘルダーに触発されて Volkslieder を収集しているが、おなじ事を Bauernregel についてもおこなったということであろう。ここには Volksmund への共感があると書いていいだろう。この16の法則とそれを話す人たちの関心の深さ、これは今日迷信として無視されがちな Bauernregel をゲーテ時代に人々がいかに重視していたかを示す重要な歴史証言である。

しかしこの羅列の仕方はこの文の中でかなり不自然である。ここでだけ細かな描写、例えば誰が話したのか、その者はどのような服装だったのか、どんな声の持ち主なのか、身分はどうだと思われるのか、一切記録されていない。ただの列挙である。また Trockner April ist nicht der Bauern Will'. では April と Will' が韻を踏んでいるし、Viel Sonnenschein im August bringt guten Wein. では Sonnenschein と Wein が韻を踏んでいて、Bauernregelらしい Merkvers になっているが、Die Fischer haben von der Hechtsleber dieses Merkmal, welches genau eintreffen soll: wenn dieselbe gegen dem Gallenbläschen zu breit, der vordere Teil aber spitzig und schmal ist, so bedeutet es einen langen und harten Winter. においては叙述があまりにも散文的で Bauernregel の体をなしていない。漁師が言い伝えている言葉をそのまま記したというより、内容を筆者が自分の言葉で書きとめたただけのものであろう。学問的なコレクションとしては杜撰である。しかしこのことは Straßburg 時代のエピソードを思い出させる。あの有名な Heidenröslein をめぐる話である。ゲーテはこの時期 Herder から多大な影響を受ける。そしておそらくは實際現に民間伝承として伝えられ歌われていたものでなく、Paul van Aelst

の歌集からヒントを得て、有名な Heidenröslein を1770年か1771年始めに創作する。この今日の研究者も Kunstballade と見做している作品を Herder はなんと彼の Volksliedsammlung に入れているのである。Herder の Volkslied の概念はかなり曖昧で、彼はその特徴を Kinderton という語で定義しているが、要するに Herder には Volkslied のような響きがあればそれで誰が手を加えていようが、個人の創作であろうが何でもよかったので、今日の Volkslied と Kunstlied の違いなど考えつきもしなかったのである。ゲーテも Volkslied そのものか、その改作か、それとも創作か、少しも区別しなかったのである。この種の区別のなさ、いい加減さがこの Bauernregel の記述にも表れていると考えられる。Straßburg 時代にゲーテが Volkslied を採集したことについて、Erich Trunz は Er hat nicht wie Herder und noch Brentano und Arnim umgedichtet und Lücken ausgefüllt. と言い、また初めてゲーテが歌詞だけでなく、曲にも注目したことを評価して、ゲーテが最初のドイツの民謡蒐集家であった、²⁷⁾ と言っているが、Bauernregel については、本当に流布していた言葉をそのまま書き取ったのかは、後述の Kartoffeln の謎々を改変していることからして、疑わしい。

また日記には注目すべき記述がある。この作品にこれらの Bauernregel が挿入された日が分かるのである。1816年9月21日の日記には Zum St. Rochusfest. Bauernregel とあり、翌21日にはこうある。

22. Bauernregeln am Rhein ins Rochusfest.

この ins Rochusfest の4格はこの日にこの作品に挿入されたことを示している。この事実。

またゲーテはこの祝祭の催された1814年8月16日ではなく、同年9月6日の日記に

Sprichwörter und Redensarten. Weinbau, Mühe. Vortheile. Gewinn, Verlust.

と記している。この時は先述したように Winkel にある Brentano の領地に滞在していた。この時 Bauernregel などの知識を得たと思われる。また作品ではこの16の Bauernregel が言われた後にひとりの山岳地帯の住人が「あなたの所でもこのような事を言うのか？」と尋ねられて「こんなに種々様々ではないが」と言って次の健康法を披露する。

Morgens rund,

Mittag gestampft,

Abends in Scheiben;

Dabei soll's bleiben,

Es ist gesund.²⁸⁾

実はこれは謎々である。この作品にはこの謎々の答えは書かれていない。しかし日記には

Morgens rund,

Mittag gestampft,

Abends in Scheiben,

Dabey will ich bleiben.

(Cartoffeln)

と答えも書かれている。だが、後半部が作品に書かれたものとは異なる。また記されている日記の日付はSt.Rochusの祝祭のあった8月16日ではなく、2週も後の8月31日である。

これらのことから、この作品 *Sankt-Rochus-Fest zu Bingen* はタイトルの直後に Am 16. August 1814と日付が入っていてこの日にゲーテが見聞したことを記した旅行記で、ノンフィクションであるかのように現代の読者は読みがちであるが、実際はある部分フィクションであり、この日1818年8月16日に起きたことの記述ではなく、他の日に見聞きしたことも取り込んだ、この日にあり得たかもしれないことの記述なのである。これがBauernregelに注目して作品を見た結果である。

注

1.

- 1) Kimura-Sagara DEUTSCH-JAPANISCHES WÖRTERBUCH Tokyo 1963
- 2) SAGARA Großes DEUTSCH-JAPANISCHES WÖRTERBUCH Tokyo 1966¹⁾
- 3) 三修社 新現代独和辞典 Tokyo 1997
- 4) 小学館 独和大辞典 Tokyo 1998²⁾
- 5) 郁文堂 独和辞典 Tokyo 1993³⁾
- 6) 同学社 アポロン独和辞典 Tokyo 1994
- 7) 三省堂 クラウン独和辞典 Tokyo 1997²⁾
- 8) M. HEYNE DEUTSCHES WÖRTERBUCH Leipzig 1905²⁾
(Reprographischer Nachdruck von SANSYUSYA VERLAG TOKYO)
- 9) Ruth Klappenbach u. Wolfgang Steinitz: Wörterbuch der deutschen Gegenwartssprache Berlin 1974
- 10) DUDEN Deutsches Universalwörterbuch Mannheim,Leipzig,Wien,Zürich 1996³⁾
- 11) DUDEN Das große Wörterbuch der deutschen Sprache Mannheim,Leipzig,Wien,Zürich 1993²⁾
- 12) Wahrig Deutsches Wörterbuch München 1986³⁾
- 13) BROCKHAUS WAHRIG DEUTSCHES WÖRTERBUCH Wiesbaden,Stuttgart 1980
- 14) Bauernregeln Eine schweizerische Sammlung mit Erläuterung von Albert Hauser Zürich,München 1975²⁾
- 15) Georg Haddenbach: BAUERNREGEL Niederhausen/Ts. 1992 S.52
- 16) 瀬川真由美 『猫の嘆きと白ネズミ ドイツ語の動物表現』 Tokyo 1996 S.37f.
- 17) Haddenbach S.29
- 18) Haddenbach S.54
- 19) Hg. von Christa Kilian: Bauernweisheiten rund ums Jahr Niedernhausen/Ts. 1994/1995 S.43

- 20) a.a.O. S.49
- 21) a.a.O. S.59
- 22) a.a.O. S.71
- 23) a.a.O. S.83
- 24) Hg. von Rudolph Eisbrenner: Das große Buch der Bauernweisheiten Würzburg 1997 S.154
- 25) a.a.O. S.159
- 26) a.a.O. S.168
- 27) Haddenbach S.79
- 28) a.a.O. S.82
- 29) a.a.O. S.85
- 30) Kilian S.168
- 31) a.a.O. S.170
- 32) a.a.O. S.172
- 33) a.a.O. S.173
- 34) a.a.O. S.175
- 35) a.a.O. S.182
- 36) a.a.O. S.184
- 37) a.a.O. S.185
- 38) a.a.O. S.189
- 39) a.a.O. S.199
- 40) a.a.O. S.203
- 41) a.a.O. S.218
- 42) ebenda
- 43) a.a.O. S.219
- 44) a.a.O. S.223
- 45) a.a.O. S.214
- 46) a.a.O. S.180
- 47) a.a.O. S.181
- 48) Eisbrenner S.44
- 49) a.a.O. S.22
- 50) a.a.O. S.28
- 51) Kilian S.242
- 52) Eisbrenner S.250
- 53) Kilian S.259
- 54) a.a.O. S.261
- 55) ebenda
- 56) Horst und Annelies Beyer: Sprichwörterlexikon Leipzig 1984 S.6ff.
- 57) a.a.O. S.16

2.

- 1) Hg. von der Akademie der Wissenschaften der DDR, der Akademie der Wissenschaften in Göttingen, der Heidelberger Akademie der Wissenschaften: GOETHE-WÖRTERBUCH Stuttgart, Berlin, Köln, Mainz 1989 S.104
- 2) Friedrich Gundolf: Goethe Darmstadt 1963
- 3) Georg Brandes: Goethe Berlin 1922
- 4) Emil Staiger: Goethe Zürich 1958
- 5) Karl Otto Conrady: Goethe Leben und Werk Frankfurt am Main 1987
- 6) Johann Wolfgang Goethe: dtv Gesamtausgabe 29 München 1963 S.281f.
- 7) GOETHE'S WERKE Hamburger Ausgabe in 14 Bänden Hg. von Erich Trunz Band10 S698ff.
- 8) Gero von Wilpert: GOETHE-LEXIKON Stuttgart 1998 S.923
- 9) a.a.O. S.114
- 10) GOETHE'S WERKE Herausgegeben im Auftrag der Großherzogin Sophie von Sachsen Lizenzausgabe der Sansyusya Publishing Tokyo 1975 III. Abtheilung 5. Band S.126
以下ゲーテの日記については本文中に年月日を, 書簡については宛先と年月日を記す。
- 11) Georg Balzer: Goethe auf Reisen München 1979 S.186
- 12) Johann Peter Eckermann: Gespräche mit Goethe Wiesbaden 1975 S.62
- 13) Wilpert S.923
- 14) Michael Ruetz: Auf Goethes Spuren Zürich, München 1978 S.138
- 15) Balzer: S.187f.
- 16) Hamburger Ausgabe Bd.10 S.700
- 17) a.a.O. Bd.12 S.145
- 18) a.a.O. S.146
- 19) a.a.O. Bd.10 S.407
- 20) a.a.O. S.413
- 21) a.a.O. S.410
- 22) a.a.O. S.411
- 23) Hamburger Ausgabe Bd.10 S.421
- 24) a.a.O. S.421f.
- 25) a.a.O. Bd.9 S.251
- 26) a.a.O. S.685
- 27) a.a.O. Bd.1 S491
- 28) a.a.O. Bd.10 S.422

